

# 日本における進化論の受容と展開

——丘浅次郎の場合——

廣 井 敏 男  
富 樫 裕

## はじめに

1859年チャールズ・ダーウィンによって確立された進化論の日本における受容は、1877(明治10)年の東京大学でのエドワード・モースの講義をもって嚆矢とする<sup>1)</sup>。以来、それはこの国の社会に広く浸透したが、大方は進化に関する学説を受動的に受け止めるだけであった<sup>2)</sup>。

ダーウィンの理論の主体的な受け入れは、ようやく明治の後半になってからで、ヨーロッパ留学から帰朝した生物学研究者を通してであった。その中でおおきな功績を果たした一人に丘浅次郎がいる。

丘は、進化論の普及を目指して大著『進化論講話』を1904(明治37)年に上梓したが、これは日本人の手になる一般人向けの初めてのものであった。それは「丘固有の偏差が入り込み、彼独自の人間観・社会観がはっきりと書き込まれていた<sup>3)</sup>」が、ダーウィンの理論を忠実に解説したものであった。そして何よりもその叙述ぶりは平易で、したがって多くの読者を獲得した<sup>4)</sup>。

丘は、進化論の普及とともに、それに根ざした教育論や社会批判などを積極的に展開した。

このように多大な業績を上げた丘であったが、それにふさわしい評価をこれまで受けてこなかったように思われる。

あらためて、ここに丘の業績と思想とを取り上げ検討してみたい。

## 1. 略 歴\*

丘は、1868(明治元)年11月、遠江国磐田郡掛塚町(現静岡県磐田郡竜洋町)に生まれる。幼少の頃から父(大阪造幣局に勤務)に英語を教わる。父の仕事がら、多数の外人技師との交際があり、また、11歳頃、大阪英語学校に入学、英語を主とする教育を受け、後に、語学に堪能となる基礎が培われた。1882(明治15)年、東京大学予備門に入学するが、暗

## 日本における進化論の受容と展開

記物の西洋史の成績が悪く、2度落第となり、予備門から退学させられた。1886年（明治19）年、東京帝国大学理科大学動物学科選科に入学、1889（明治22）年に卒業したが、その後も動物学教室に残り、研究を続けた。1891（明治24）年、ドイツに留学、フライブルグ大学でワイスマン（A. Weismann）の指導を受けるが、師の学説（生殖質説を唱え、獲得形質の遺伝を否定）に共鳴できなかったため、1年後ライプチヒ大学に移り、ロイカルト（K. G. F. R. Leuckart 下等動物の分類学、寄生虫学）のもとで2年間研究し、ドイツの学位を得た。1896（明治27）年帰国、翌年から山口高等学校教授、次いで、1897（明治30）年東京高等師範学校教授に転じ、1901（明治34）年には、同校生物科主任教授となり、1929（明治4）年に退官するまで生物学を講じた。退官後も、1934（明治9）年から2年間、非常勤講師として、同校及び東京文科大学で進化論を講じている。

丘は、当時の教育界の最高学府にあつて、1898（明治31）年には、文部省の教員検定委員会委員に任命されて以来、毎年継続して委員を務めている。また、文部省は、尋常小学校理科教科書の国定化を進めるに当たって、1904（明治37）年に理科教科書編纂委員会を組織したが（初代委員長は箕作佳吉）、丘は、当初から1918（大正7）年まで、同委員となっている。さらに、『近世生理学教科書』（明治31年、開成館）、『近世動物学教科書』（明治32年、開成館）等を著し、これらは版を重ねて普及した。

丘の生涯には、1923（大正12）年9月、関東大震災により、多数の標本・文献図書を失う非運があったか、太平洋戦争の最中の1944（昭和19）年5月病没（享年77歳）するまでの研究・著作活動には目をみはるものがある。

\* 筑波常治「丘浅次郎先生」<sup>5)</sup> 及び同編『丘浅次郎集』<sup>6)</sup> 所載の年譜を参考にした。

## 2. 主な研究・著作・評論活動

### 1) 動物学研究

丘は、コケムシやヒルの類などの比較解剖学によって、各類の種族の系統関係を明らかにしようとした。その方面の学術論文は、『動物学雑誌』等に数多く発表されている。主なものは、下記の通りである。

1890（明治23）「淡水産コケムシに関する観察」（英文）『東京帝国大学理科大学紀要』

1895（明治28）「章魚の習性」「日本産の蚯蚓類」『動物学雑誌』

1899（明治32）「複眼の構造及び作用」『動物学雑誌』

1901（明治34）「水道の蛭」『動物学雑誌』

「マラリヤ病の寄生虫」『東洋学芸雑誌』

1906（明治39）「淡水苔虫の一新種」『動物学雑誌』

1907（明治40）「清国産淡水水母の一新種に就て」『動物学雑誌』

1909（明治42）「日本産蛭類検索表」『動物学雑誌』

1922（大正11）「淡水産のクラゲに就て」『動物学雑誌』

1933（昭和8）「北千島の海鞘類」『日本生物地理学会会報』

こうした研究は、研究環境が帝国大学系に及び得ない東京高師で、丘の独力によってなされたが、当時の学会で第一級の内容と評価され、その功績により、1925（大正14）年には帝国学士院会員に選ばれている。

## 2) 主な著作・評論活動

丘は、研究論文と平行して、多くの生物学・進化論の啓蒙あるいは教育論・文明評論活動を行った。主な著作物としては下記がある。

1904（明治37）『進化論講話』 1905（明治38）『種之起原』（校訂）

1906（明治39）『進化と人生』 1914（大正3）『人類の過去現在未来』

1916（大正5）『生物学講話』 1919（大正8）『最新遺伝論』

1921（大正10）『煩悶と自由』 1927（大正15）『猿の群れから共和国まで』

## 3. 進化論の紹介・普及活動——『進化論講話』の概要と同書に対する批判

### 1) 「進化論講話」の概要

本書は、1904（明治37）年1月に刊行されたが、刊行時の時代的背景としては、明治政府が対露交渉を続けるかたわら開戦の準備を進めており、内村鑑三・幸徳秋水・堺利彦らが非戦論・反戦論を唱え、開戦論者との間での論争が激しかったことを指摘できる。なお、同年2月には日露戦争が勃発、翌年5月には日本海海戦で勝利を治め、日本は世界の列強の仲間入りをし、軍備拡張とともに資本主義が発展してゆく。

丘は、本書の「はしがき」において、進化論は、元来は生物学上の原理であるが、人間に対する考えを根底から改め、そのため全ての思想に著しい変動を起こし、社会の進歩・改良の上に大関係を有するものゆえ、多くの人々が知っていてしかるべきなのに、今日、日本語で書かれた進化論の書物と云えば、石川千代松著『進化新論』ばかりで、しかもこの書は専門書であるので、ここに「進化論を普及せしめたいとの精神」で本書を著すことにしたとの趣旨のことを述べている。

『進化論講話』は、20章からなるが、下記の構成になっている。

「1. 緒論」は、進化論の定義をして、進化は事実にして疑うことはないを指摘している。「2. 進化論の歴史」では、リンネ（生物種属不変の説）、ラマルク（動物哲学）、キュビエ（天変地異の説）、ライエル（地質学の原理）の所論を紹介し、最後にダーウィンの『種の起

原』の概要を述べている。「3. 人の飼養する動植物の変化」「4. 人為淘汰」「5. 野生の動植物の変化」「6. 動植物の増加」「7. 生存競争」「8. 自然淘汰」まではダーウィンの自然淘汰説を説明し、「9. 解剖学上の事実」「10. 発生学上の事実」「11. 分類学上の事実」「12. 分布学上の事実」「13. 古生物学上の事実」「14. 生態学上の事実」では進化の証拠をあげ、「15. 外界より動植物に及ぼす直接の影響」を述べている。「16. ダーウィン以後の進化論」では、ハックスレー、ヘッケル、ウォーレス、ワイスマン、ローマネス、ヘルトウヒ等の各氏について略述し、ダーウィン説に対する反対説の略評にまでおよんでいる。「17. 今日の日所、既に確である点」で今日までに容認されている進化論の結論をまとめている。「18. 自然に於ける人間の位置」では、人類は獣類の一種、説くに猿類に属することが強調され、「19. 他の学科との関係」では、進化論と哲学・倫理・教育・社会・宗教との関係について丘の私見が述べられている。そして「20. 結論」で、さらに進化論を知ろうと欲する人のため、「16. ダーウィン以後の進化論」であげた人々の著作物 10 種を解題している。

丘は、「進化論とは如何なるものであるかといふに、一言でいへば、動物植物ともに何の種類でも長い年月の間に次第に変化するものである」と定義し(2頁)、「生物進化の理由を説明するのに自然淘汰の説を初めて考えたのはダーウィンであるが、生物進化論を以てダーウィン説と見做すことは、決して穏当ではない」(41頁)のであって、ダーウィンの『種の起原』第6版(1872年刊行)後、『進化論講話』初版(1904)までの30余年の間に蓄積された生物学の知見によって、進化論そのものも進化しているとする。一例をあげれば、血清試験で動物種属の類縁関係の濃淡を示し得ることなどである。

このことを念頭に置いて、『進化論講話』(明治44年版)を読み直すと、下記の事が指摘できよう。

- ① まず、一見して気が付くことは、図版が極めて多い。全体で114図あり、その中には、全1頁使ったの挿入図が、植物の群落、哺乳類の発生比較、他の脊椎動物発生比較、南アメリカに固有な動物、アフリカに固有な動物、オーストラリア地方に固有な動物、駝鳥、大狸々の8図がある。印刷技術の進歩を考慮しなければならないが、『種の起原』には1図(分岐及び絶滅の概念図)しかないのと対照的である。
- ② 丘は、ダーウィンの『種の起原』を「実に感服に堪へぬ本である」と評して、その理由として、その「十倍も大部な書物が書ける程に十分な材料が集って居る中から、最も必要な部分だけを選び出して、短く書いたものである」としている。それを肝に銘じてか、丘が提示している進化の証拠は、解剖学・発生学・分類学・分布上・古生物学上・生態学上の事実を本文635頁中406頁、つまり約64%を割いて取り上げている。
- ③ 「生態学上の事実」を独立した章として設定し、「動物の生活状態を調べると」自然淘汰説の論拠となる事実(むしろ生存競争のための事実というべきか)があるとして、攻撃の器官、防禦の器官、保護色、警戒色と擬態と、気候の変化に対する準備の各項を紹介

介している。

- ④ 下記のように、日本において見聞できる卑近な例が随所に取り上げられている。例6を除いて、いずれも図版付きである。

例1 植物の変種として、大根（細いもの・宮重や練馬のように太いもの・桜島のように大きいもの）、朝顔や菊のように夥しい変種が造られている。（57-8頁・人の飼養する動植物の変化）

例2 海岸の岩石に付着して生活しているフジツボは、蝦や蟹とは異なり移動できないが、それが故に少量の食物ですみ、打ち寄せる波に流されずに生活している。（170頁・自然淘汰）

例3 水中に住むゲンゴロウの雄の前足が吸盤のようになっていて、雌を離さぬ仕掛けになっている。（184頁・雌雄淘汰）

例4 ウニ、ヒトデ、ナマコ等の棘皮動物は、成体は多様であるが、幼生は酷似している。（258頁・発生学上の事実）

例5 コクサギ、タンポポ、ヒサカキ、ヤブジラミ等の種子の散布の仕方を説明している。（297-8頁・分布学上の事実）

例6 例えば、猿、猪、羚羊、狐、鼬、雉子、山鳥等、本州・四国・九州に産する日本固有の動物が北海道にはないかわりに、北海道にはシベリア地方と共通するものが多い。津軽海峡が境界になっている。（333頁・分布学上の事実）

例7 「我国には処々に貝塚というて古代の人間が食用にした貝の殻が一箇所に夥しく堆くなって居る処がある」と述べている。（371頁・古生物学上の事実）

例8 マムシやハブには毒液を分泌する腺があり、毒液で麻痺させた後飲み込む。（386頁・生態学上の事実）

例9 カレイ、ヒラメなどは、背面の色も模様も全く砂の通りである。（406頁・生態学上の事実）

- ⑤ ダーウィン以後の進化論を検討した上で、「今日の所、既に確である点」を総括して、生物種族が漸々変化すること、一種の生物から数種に分かれてくることも争えない故、現今似て居る種族は皆共同の祖先から降ったもので、相似る度の甚だしいもの程、共同の先祖から相分かれることが遅かったもの、即ち類縁の互いに濃いものと見做されること、さらにこの考えを推し進めれば、生物の起原は唯一種であって、今日見るところの数十万の動植物の種族は悉くこれより樹枝状に分かれ降った子孫であると論ぜざるを得ないとしている。（530-1頁）

- ⑥ 証拠は少ないがと断った上で、“獲得形質の遺伝”を是認する記述が見られる。

例えば、「外界から生物に及ぼす影響は、その一代に限られて、子孫には少しも関係が無い理屈」と「次の代には、先代とおなじだけの直接の影響が付け加はって来れば、



其の結果は尚一層変化の進んだものが出来て、代々少しずつ一定の方向へ進化する理屈」とがあるが、「今日まで知られた事実から推すると、斯かる変化の中で、或種類だけは幾分か確に遺伝する様である」といった記述がある。(428頁)

また、ワイスマンが生殖質連続説を主張し、獲得形質の遺伝を否定していることに対して、「其遺伝に関する学説だけは如何にも余り造り過ぎてある様に感ぜざるを得ぬ」としている。(498頁)更に「外界に変化が起れば、生物の体にも直接の影響を及ぼすもので、其のため生物が漸々変化することは確である」と述べている。(530頁)

⑦ 生存競争を論ずるに当たっては、“競争”という字の意味を広くして用いなければならないとしている。つまり、我々は普通人間社会に行われる互いに敵意を挟んだ故意の競争ばかりを見慣れているが、競争には意識的なものと無意識的なものがあること、異種属間の競争と同一種属内の競争の別があること、個体間の競争と団体間の競争もあること。そして大体にして、生物の競争は九分通りまで無意識的である。(130-131頁・生存競争)

⑧ ダーウィンは、人間の扱いについては、『種の起原』では極めて慎重であったが、丘は、ダーウィンの時代的ずれはあるものの、人は身体の構造・発生等を調べても、精神的動作から論じても犬・猫と同じく獣類の一種であると断言して憚りない。(558頁・自然に於ける人類の位置)

⑨ 進化論によって、従来の諸学科を根本的に見直さなければならないとして、下記の指摘をしている。

「哲学は、全く実験と離れて、単に自己の思考力のみによりて一切の疑問を思弁的に解かうと努め」るが、人間の思考力は絶対完全なものではなく、「万世不変の真理」などあり得ない。実験観察と思考力とを併せ用いた結果が真である。(581-598頁)

「従来の倫理学は規範学科と称して単に思考力のみによりて、高尚な議論ばかりをしていた」ので、人生と縁の遠い有り様になった。道德心の起原については野蛮人と諸動物の習性を実験的に研究していく必要があるし、善悪の標準は時と場合とに随うて改めなければならない。(589-595頁)

ここには、丘が思弁を嫌い、実験観察による事実を重視する姿勢が現れている。

他の動物の中にも子を教育する例は幾らでもある。それは、特に高等動物では種族維持のため、教育して競争に負けないよう仕上げなければならないからである。されば「教育といふことは、生殖作用の追加とも見るべきもので、其目的は生殖作用と同じく、種族維持繁栄にあることは、少しも疑を容れぬ」のである。(595-600頁)

ここにおいても、丘が人間を動物界における特別な存在ではないことを明白に示している。

社会改良策を論ずるにあたっては、「競争は進歩の唯一の原因であり」「力のあらん限り競争に勝つことを心がけるより外には致し方ない」のであり、人種維持の点からすると、「雑

草をかり取らねば庭園の花が枯れて仕舞ふ通り、有害な分子を除くことは人種の進歩改良に必要なことで」尚一層死刑を盛にして、悪人は容赦なく除いて仕舞うた方が遥かに利益がある（600-605頁）。

ここには、丘の生存競争重視の信念が伺われる。

進化論は生物界の一大事業を説いているが、宗教は単に信仰に基づくものである故、この二者には「共通の点は少しもない」「諸行の無常なのは明白であるが、無常を感じて世を捨てるといふのは大きな間違いであらふ。人種的自殺を望まぬ以上は、斯かる傾のある宗教は、務めて駆除せねばならぬ」（605-611頁）

これから、丘は無常主義に否定的であることが分かる。

## 2) 「進化論講話」に対する論評

『進化論講話』が出版されるや、たいへんな評判になり、当時のベストセラーになったという<sup>7)</sup>。と同時に、さまざまな論評がなされることになる。例えば、下記がある。

例1 桑野久任は、開成館主人から『進化論講話』についての紹介を求められたとして、『動物学雑誌』第16巻（明治37.2）に「新著紹介」をしている。これによると、本書所載の大眼目は科学上既に確定している事実であり、容易に認められている理論であるので、何等の評語を下すことはないとして断った上で、本書の評価すべき点として、①言文体を採用していること、②引例の豊富なこと、③比喩が卑近であること、をあげている。次いで、欠点としては、①図説明が不親切であることと、②「人は獣類の一種である」（558頁）の項を設けているが、これは事実だとしても、殊更に“獣”という字を用いず、著者自身が外の所で使っているように「人は哺乳類の一つ」で済むはず、それはこの一字があるがために、一般庶民の悪感を買う疑念があるから、と指摘している。

例2 北一輝（1883-1937）は、社会主義者と交流のあった早稲田大学聴講生の時期に、『国体論及び純正社会主義』（明治39年）を自費出版したが、その「第3編 生物進化論と社会哲学」の中で、「代表的学者としての丘博士の『進化論講話』」の項を設け（98-102頁）、批判をしている。それは、一般世人に生物進化論を普及させる目的をもって書かれたと云われる『進化論講話』の大著が「最後の暗黒なる頁を以て社会進化論の宣伝を障害し、社会主義に対する誤妄を伝播するの力ある」からである。北は続けて「而して其の暗黒なる頁の中に凡て獣類教の生物進化論と個人主義の生存競争説を遺憾なく發揮したるを以てなり。死刑淘汰の刑法論あり（A）。歴史の進化を無視し革命の意義を解せざる社会循環論の思想あり（B）。異人種間の殺戮的競争を主張する積極的尊王攘夷論あり。人種の発展国家の強盛は其の人種内国家内の個人間の競争に基くと云ふ個人主義の生存競争説あり（C）。種族維持としての生殖なることを解せざる人口論あり（D）。異人種異国間には永久に戦争は消滅せず世界一社会となる社会進化の将来を空想なりと云ふ螺旋的国家学あり

(E)」と論評している。

北の批判 (A-E) に、対すると思われる丘の反論は以下の通りである。( ) 内の数字は、『進化論講話』(修正 10 版) での掲載頁を示す。

A. 「雑草をかり取らねば庭園の花が枯れて仕舞ふ通り、有害な分子を除くことは人種の進歩改良にも最も必要なことで、之を廃しては到底改良の実は挙げられぬ。単に人種維持の上からいへば、尚一層死刑を盛にして、再三刑罰を加へても改心せぬ様な悪人は容赦なく除いて仕舞ふた方が遙かに利益である。」(604 頁)

B. 「社会改良家が幾通り出ても、悉く痴人の夢を説くが如くであるのは、何故かといへば、一は人間とは如何なるものかを十分に考へず、猥に高尚なものと思ひ誤って居ること、一は競争は進歩の唯一の原因で、苟くも生存して居る間は競争の避くべからざることに気附かぬことに基づく様である。」(600 頁)

「社会の有様に満足せず、大革命を起した例は、歴史に幾らもあるが、何時も罪を社会の制度のみに帰し、人間とは如何なるものかといふことを忘れて、唯制度さへ改めれば、黄金世界になるものの如く考へてかかる故、革命の済んだ後は、唯従来権威を振うて居た人達の落ちぶれたのを見て、暫時僅かの愉快を感じるの外には何も面白いことなく……」(601 頁)

C. 「異人種間の競争の結果は各種族の栄枯盛衰であって、同種属内の競争の結果は其種族の進歩・改良であることは、前にも説いたが、之を人間に当て嵌めても全く其通りで、異人種間の競争は各人種の盛衰存亡の原因となり、同人種内の競争は其人種の進歩・原因となる。それ故、数多くの人種が相対して生存して居る上は、異人種との競争が避けられるのみならず、同人種内の個人間の競争も廃することは出来ぬ。」(600-1 頁)

D. 「世間には、生活の苦しみは競争が劇しいのに基づくことで、競争の劇しいのは、人口の増加が原因である。それ故子を産む数を制限することが、社会改良上第一に必要な考を持つて居る人もあるが、是は決して得策とは云はれぬ。」(603 頁)

E. 「世の中には戦争を全廃したいとか、文明が進めば世界中が一国になって仕舞ふとか云ふやうな考を持っている人もあるが、此等は生物学上到底出来ぬことで、利害の相反する団体が並び存している以上は其間に或る種類の戦争が起るのには決して避けることが出来ぬ。全世界が一团となって戦争が絶えるといふ様なことの望むべからざるは無論である。」(602-3 頁)

こうした批判は、「否！ 未だ混沌として組織なき生物進化論の祖述として『進化論講話』の全部を通じて、生存競争の単位を定めず、生存競争の目的を解せず、生存競争の対敵を誤まり、生物種族の階級に伴ふ生存競争の内容の進化を知らず、生物進化論に於ける食物競争と雌雄競争との地位を注意せず、人類種族の今日の地位及び今後の進化を推及することなし。」と言って締めくくられる。

例 3 石川三四郎 (1876-1956) は、日本における社会主義・無政府運動の先駆者として知られているが、その著『非進化論と人生』(白揚社、大正 14 年)において「丘博士の進化論」の章を設け、「今時分この様な進化説を批評するのは馬鹿らしくもあるが」と断った上で、『進化論講話』を批判している。以下は、その要点である。(なお、石川は、同書の



明治38年第5版から引用している。[ ]は、その該当頁である。）

- 1) 進化：丘博士は「常に異種間にも同種間にも激烈な競争が日夜絶えず行はれて居るが、異種間の競争によって、各種の盛衰存亡が定まり、同種内の競争によって其種が進化する」のだという。「此の生存競争の結果は優勝劣敗となり、茲に自然淘汰が行はれる」と説く。

生物界を支配する法則は単に生存競争のみで無くて、寧ろ相互扶助の道徳が最も有力に動いて居ることは、無政府主義の聖者クロボトキンの力説した処で、世間一般に認められた学説である。[72頁]

- 2) 自然淘汰：「自然淘汰の結果、体の構造が簡単より複雑に向ふことである」そして「分業の進んだものの方が勝つとして見て宜しからう」といふ。その一方で「所謂下等動物の生存すべき余地は其間に十分存して決してなくなることはない」「それ相当な位置を占めて繁殖して行くことが出来る」そればかりでなく「複雑体の方が却って弱い場合がある。例えば「人間などは脳を打たれても、心臓を打たれても鉄砲の丸一個で死んで仕まふが、水母などの如きものになると、全身篩の如くに打ち抜かれても平気である」、故に「高等動物と下等動物との間に優劣を区別することは決して出来ぬ訳である」と説かれる。

分業が進んだ複雑なもの即ち高等動物が勝つと言ふ説と、下等動物との間に優劣を区別できぬといふ説とが、同じ丘氏から出るのは随分不可思議といふべきではないか。人間が死んで水母が生きていたら、劣者が勝った訳では無いか。[74-5頁]

- 3) 進化と退化：丘博士は「進化と退化とは字で見ると相対立して反対の意味を有するもののごとく思はれるが所謂退化といふのも矢張り適者が生存して生じたもの故、決して進化以外のものではなく、単に進化の特別の場合に過ぎぬ」例えば、「暗黒な洞穴の水中からは是れまで種々の魚類等が発見せられたが、孰れも普通のものとは違って、盲目のものばかりである」という生物は、本来眼明きものから退化即ち進化したものである。こうなると、今度は所謂高等動物から下等動物が進化したものだと立派に立論することも出来るのである。単に自然淘汰、適者生存の理屈から推すと右の如く顛倒の議論も成り立つのである。若し優勝劣敗、適者生存が生物界を支配する法則であるとすれば、現存する総ての生物は滅亡した総ゆる生物に優勝したものと言へる。そして其現存者間では何れが優者、何れが劣者、不適者であるか判らないといふ。果たして然らば、適者又は優者なるが故に勝存するのではなくて、勝者生存者なるが故に適優者なのだと、と言はねばならぬ。此場合には唯結果によりて原因を判断するに過ぎない。此に於て、滅びたマンモスや猿人は蚯蚓や蝸牛よりも劣者となる。退化は同時に進化であり、生存競争も無競争も進化の原因となる。丘氏の進化論ほど人間の理解力を愚弄した学説は恐らく世界に稀有であらう。[76頁]

4) 本能と利害：例えば、ニュウジランド島に居る駝鳥は、「其翼は外から全く見えず、撫でて見て僅かに手に触れる位である」そして「昼間は穴の内に隠れ、夜になると出て来て、太い足で地面を掘り、虫を食って生活している」丘氏はこれを説明して「ニュウジランド島の如きは昔から狐、狸はいふに及ばず、総て獸類といふものが居なかつた所故、夜出て歩く鳥などには、実に安全な所で、翼を用いる必要は無かつた云々」と言つて居る。そして此の鳥は「翼の発達した先祖から降つたといふ方が余程真実らしい」とのことである。

然し若し此鳥が此島に発生し、此島に昔から獸類が居なかつたら始めから「翼の発達した先祖」など無かつたであらうし、若し又、他から飛んで来てから、永年の間に翼が此の様に退化即ち進化したものならば、其本国たる何処かに、此駝鳥に翼の付いたものが発見されそうなものである。昼間何の危険も無い此島に住みながら、日中は穴居して夜ばかり出歩くといふ習性も、生存競争からは解釈出来まい。

亦生物界に闘争の行われるのは、必ずしも食ふため、又殺すためではない。其多くは闘争の本能を満足させるばかりである。人間が競技を好むのと違いは無い。鶏は能く闘ふ。けれども敗者が免れ去る時、勝者は必ずしも後を追ひかけたりはしない。競技本能の闘争は決して生存競争と同じでは無い。無論自然淘汰の原因にはならない。進化論者の生物観は此点に大なる誤謬がある。[78-9 頁]

5) 生物の起源は一種か：丘博士は曰く「生物の種族は一種より分かれて数種となるもので、今日数種の生物も、其先祖は一種であるとすれば、生物種属の数は昔に遡るほど減じなければならぬ筈である。(中略) 其極に達すれば、終に一種より無い時代が有つたものと結論せねばならぬ」

是れは又、甚だしい独断と言はねばならぬ。生物の或る種が一種より分かれて数種となつたからとて、総ての生物が一種より分生したとは言へない。幾千万年か以前に、太陽から来る物理的、化学的作用によって混沌たる地球に生命が発したと仮定する。こうして地球の表面に動き初めた生命は、其発生の処と時とに従て既に最初から各々環境を異にして居たであらう。此各自異なりたる環境に植え付けられたる生命は、其第一歩の出発点からして既に異なるものがあつた。されば諸生物の原始がアミイバであると仮定しても、其アミイバは既に無数の種類に別れていたと想像することが出来る。[80-1 頁]

なお、人類の先祖に関しても、丘は一元説を採っているのに対して、石川は「私の既得知識、換言すれば既知事実を徴すれば、多元説の方が真理である様に思はれる」としている。[82 頁]

なお、石川は、本章の最後に、「十九世紀より二十世紀にかけて進化論が世界に流した害毒は到底之れを計算すべきで無い。併し別に進化論罪歴史を書きたいと思つて居るので、茲

には唯物論上の批評を試みるだけにして置く」と結んでいる。

### 3) 『種之起原』を校訂

ダーウィンの『種の起原』は、1896（明治29年）に、文学士立花銑三郎によって初めて翻訳され、『生物始原 一名種源論』と題して公刊された。

これに次いで、丘浅次郎（註1）は、1905（明治38）年に、生物学者として初めて『種之起原』を校訂、「生存競争適者生存の原理」の副題がつけられて東京開成館から刊行された。奥付には、「明治38年8月8日印刷、同38年8月12日発行、原著者 チャーレス・ダーウィン 翻訳者 東京開成館、発行所 東京開成館 定価金3円」とある。

加藤弘之が4頁を使って「はしがき」を書いているが、まず、『The Origin of Species』が刊行されるまでの経緯について記している。それによると、ゲーテ氏、カント氏等が既に進化と云ふことに気づいていたが、その進化の手段が何であるかについては、容易に解釈が出来なかったこと、その後ラマック氏が出て、生物の器官の用不用に依って次第に其身心に変化が生じたために、遂に進化を促すことに違いないと説いたこと、ダーウィン博士が出て、所謂生存競争、自然淘汰と云う作用によって進化することを発見したこと等が述べられている。そして、今日に至っては、この生存競争、自然淘汰の主義は、特に生物学上に採用されるに止まらず、あらゆる科学は勿論又哲学上にさえ採用されることとなり、この理を外にしては、殆ど何事も解釈の出来ぬようなわけになったのであると、ダーウィンの功績を讃えている。この「はしがき」の最後に、加藤は、「吾が邦にも曾て此の書の翻訳が出たよしなれども、其書は今日は全くないと云ふことである（註2）。扱て今回開成館の西野虎吉君が庄田氏外二文学士（註3）に翻訳を託し、丘理学博士に校閲を請うて（註4）出版することになった。

就いては余に何か一言せよとの依頼があるが、余は先頃到大患後疲労して居て、有益なことを述べる気力がないから、唯是れだけのことを述べて責を塞ぎとするに過ぎぬ。明治三十八年六月三日 法学博士・文学博士・男爵 加藤弘之」と述べている。

註1 なぜか、浅次郎となっている。

註2 これは、立花銑三郎訳『生物始原 一名種源論』翻訳本を指していると思われるが、発行部数が少なかったのであろうか。

註3 フルネーム不明。

註4 丘がどの程度、校訂にかかわったかは不明であるが、彼が校訂した書物はこれが唯一であろう。

続いて、理学博士 渡瀬庄三郎が「ダーウィンの一生及びその事業」について103頁を使って解説している。

## 日本における進化論の受容と展開

しかし、校訂者の丘の弁は、全くない。どの程度校訂にかかわったか不明であるが、語学に堪能な丘が邦訳書を出版していないことと関連して推察するに、必要且つ不可欠な欧米書は原本で読むべきとの見解と自身の著作による持論の展開を重視する姿勢とから見て、あえて弁を避けたのではなかろうか。

本書は、全 894 頁、索引 28 頁で、「目次」は、下記の通りである。

本書第一版の出版以前に於ける種の起原に関する説の略沿革

第一章 飼養の下に現るる変化 第二章 自然の下に現るる変化 第三章 生存競争 第四章 自然淘汰すなわち最適者生存 第五章 変化の法則 第六章 学説の困難 第七章 自然淘汰の学説に対する種々の反対説 第八章 本能 第九章 間種 第十章 地質学的記録の不完全に就いて 第十一章 有機生物の地質学的継続について 第十二章 地理的分布 第十三章 地理的分布（続き） 第十四章 有機生物相互の関係 形態学 発生学 發育未完の器官 第十五章 約説及び結論

この「目次」から見て、『種の起原』の第 6 版の邦訳であることが分かる。因みに初版では、①第四章が「自然淘汰」となっていて“すなわち適者生存”がなく ②「第十五章 約説及び結論」は初版にはない。（徳田御稔編『初版種の起原一訳と解説―』（昭和 34、三一書房）参照）

### 4. 教育改革論・文明批評の展開

丘は明治末期から大正期にかけて、『中央公論』『雄弁』『太陽』等の総合雑誌及び『教育研究』『教育学术界』『帝国教育』等の教育雑誌に寄稿し、ユニークな教育改革論、文明批評を展開している。これらは、『進化と人生』・『煩悶と自由』に収録されている。

#### 1) 『進化と人生』（以下「人生」とする）

本書は、1906（明治 39）年 6 月に刊行されたが、1911（明治 44）年 8 月には、増補再版が発行されている。本書の目次は、下記の通りである。

増補改版はしがき 1. 人類の誇大狂 2. 脳髓の進化 3. 芸術としての哲学 4. 生物学的の見方 5. 動物界に於ける善と悪 6. 人道の正体 7. 理想的の団体生活 8. 人類の生存競争 9. 戦争と平和 10. 生物学より見たる教育 11. 民族の発展と理科 12. 教育と迷信 13. 誤解せられたる生物学 14. 所謂自然の美と自然の愛 15. 自然界の虚偽 16. 動物の私有財産 17. 所謂文明の弊の源 18. 進化論と衛生 19. 民種改善学の実際価値 20. 人類の将来

丘の「増補改版はしがき」には、本書は著者がこれまで種々の雑誌に寄稿した短篇、所々の学会で話した講演の速記の中から若干のものを選び出し、足らざりし所を補い書き改めた

ものであること、総て著者が自然と人生とを直接に観察して獲た所を忌憚なく書いたもので、悉く著者一人の意見であること、本書の第一版を発行したのは明治39年であったが、その中に掲げた各篇が雑誌に現れた当時には執れも世の識者から激しく攻撃せられたにもかかわらず、これを綴り合わせた本書は意外の歓迎を受け、忽ち数回版を重ねたこと、本書の第一版を発行せられたる時、我が国新聞紙上に伝えられた如き馬鹿げた風説が起こる心配はないが、余程言い廻し方を精密にし、文章も十分に鍛えて少しの遺漏もないように注意しないと、思わぬ辺から誤解せられるところであること等が述べられている。

“激しく攻撃せられた”とは、具体的に誰が如何なる攻撃をしたのか、また、“馬鹿げた風説”とは如何なる風説なのか、確認できていない。ただ、筑波常治は、「推測するに浅次郎の主張がいわゆる“関係当局”を刺激したということではないか。進化論にそって人間の過去をのべることにしたい、つきつめると日本の当時の“国史”教育と矛盾する結果になる」と述べている<sup>8)</sup>。筑波のいう“関係当局”とは、社会主義運動の弾圧及び思想統一のために警視庁に設置された特別高等警察いわゆる特高を指しているのであろうか。“国史”教育とは、現人神を崇拜する日本史教育を指しているのであろうか。

## 2) 『煩悶と自由』(以下「自由」とする)

本書は、丘が『中央公論』『雄弁』『太陽』等の諸雑誌に掲げたものの中選定した記事をまとめたもので、大日本雄弁会から、大正10年2月初版発行、大正12年には6版を発行している。「目次」は、下記の通りである。

1. 自然の復讐
2. 触らぬ神の祟り
3. 自由平等の由来
4. 新人と旧人
5. 題字・序文・校閲
6. 戦後に於ける人類の競争
7. 劣れる民族の損と得
8. 煩悶の時代
9. 境界なき差別
10. 固形の論理
11. 何所に矛盾ありや
12. 一種の人生観
13. 一代後を標準とせよ
14. 先ずチョン鬻を切れ
15. 他力教育の危機
16. 疑ひの教育
17. 理科教育の根底
18. 実用を重んずるの弊
19. 運動復古論
20. 述懐 追加 現代文明の批評(特に本書のために執筆)

丘は、「はしがき」において、一般の読者を相手とする雑誌に掲げた8篇を初めに置き、教育雑誌に掲げた8篇を終わりに置き、何れの組にも入れ兼ねた4篇をその間に割り込ませたこと、そして本書の表題を、煩悶と自由としたのは最近に書いた最も長い2篇の題目を繋ぎ合わせて造ったに過ぎないこと、しかし、著者の根本思想を甚だ簡単であるが、稍明白に書いたのがこの2篇である故、全部に対する表題としてもこれが一番適当であること等を述べている。また、本書に収めた文の中には、未来に対する予言を含んだものが割合数多くあり、例えば人類の将来についての説は、「読者に愉快を与へる筋のものでなく、また伝統的信条と一致せぬ所も多い故、嫌ふて反対する人が少なくないことは素より承知して居る」が、「未来に関することは、未来が来れば、その正しいか誤って居たかが誰にも明に知れる



故、それまで待つのが一番である」としている。ただ、丘は、「人類の生存競争」や「戦争と平和」等で予言したことが、十年後ヨーロッパで大戦争が勃発して、的中したと自慢げに語りつつも、「昔し書いた物を自慢らしく再び持ち出すのは、即ち著者が最早時勢後れの老人に入った何よりの証拠かも知れぬ」と謙遜している。さらに、「著者は決して自分の説が正しいと信じて居る次第ではないが、反対の説に比べると、幾分か誤りを含む量が少ない様に感ずる故、駁撃に対しては何時も答へずに負けて置くことにして居る」と述べている。事実、前述の『進化論講話』には、多くの批判が寄せられたが、何も応えていない。

### 3) 両書にみられる教育改革論

#### a. 教育の目的論

「10. 生物学より見たる教育」（「人生」・197-216頁）では、教育の目的を下記のように論じている。

「教育の書物を開いて見ると、“教育トハ一定ノ目的ト方法トヲ具ヘテ教育者ガ被教育者ニ加フル所ノ働作ナリ”などと難しい定義を下しているが、元来教育と云ふ字の原語の Education という字は引き出すと云ふ意味で、被教育者の生来持つて居る智能を引き伸ばし発達せしめること、即ち智能を啓発することを云ふのであらうが、この意味に取れば教育を行ふ動物は幾らでも居る。例えば、鳥類は其の子に歌を教へ、餌を啄むことを教へるものがある。これは、所詮種族の維持という目的を達成するためにある。人間の場合でも、一国がその子弟を教育するのは現在の国民が死んでも、其の後へ世界列強の競争場裡に立ち立派に一国を維持していくに足るだけの者を残すためである。斯くの如き次第である故、生物学から見れば、国家教育の目的が自己の民族の維持発展にあることは極めて明瞭である。教育の目的は生殖の目的と同じく種族の維持にあることは明らかである。」

また、「12. 教育と迷信」（「人生」・235-265頁）において、丘は教育の目的について、種々高尚なことが書いてあるようであるが、実際においては、列国競争場裡に立って立派に独立して行けるだけの資格を備えた次代の国民を養成することにあることは確かだとしている。若し、この目的に適わぬような教育を施す国があったらば、その国の前途は頗る危ないのであると断じている。

#### b. 教育の基本方針

丘は「13. 一代後を標準とせよ」（「自由」・269-288頁、大正8年）において、教育の目的は「専ら我が民族の維持保存にある」と述べ、「今日世界で一等国と見做されて居るのは、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ等の諸国」で、「今後は如何なる民族も到る所で、此等の強い民族と競争する覚悟を要する」としている。残念ながら、我が民族は「学問芸術に於ても、殖産工業に於ても一段劣っていることは否むことの出来ぬ事実」であって、「教育者は常に先進一等国を競争の目標とし、彼等と対等の競争を為し得る程度までに、我が民

族を進めることを仕事の目的と定めて置かねばならぬ」のである。その際、「今の小学児童が四十歳、五十歳に成った頃に、其の時代の他の一等国民と競争するに当って、必要な資格を備へさせることが出来ぬ様では、今日の教育が成功したとは云はれぬ」のであって、孫や曾孫の代に我が民族に有利なようにと考えるのも結構であるが、そのような「先見の明のある教育家は頗る稀であらうから、差し当たり、一代後の事を考へ、之に適する様にと、教育の仕方を工夫出来たならば、これで満足するの外はない」とする。

今後他の民族と競争するためには、体育も徳育も皆必要であるが、教育に用い得べき時間に制限がある以上、一代後を標準とすると、知育方面に時間を増さねばならない。それは、「今後の競争に最も重大な関係を有するのは知力であって、今回の戦争の如きも、主として知力の戦争であると云はれている」からである。

#### c. 教育の改造

丘は、「14. 先ずチョン髷を切れ」（「自由」・289-303頁、大正9年）では、我が国の教育の改造は先ず何れの点より着手すべきかを説いている。丘によると、チョン髷には二種類の別があり、一つは頭骨の外にあって目に見えるチョン髷で、他は頭骨の内にあって目に見えないチョン髷である。頭の内チョン髷と云うのは「国粹保存と称する仮面を被った頑迷固陋な旧弊思想の事」であり、「明治20年代の前半の中頃には立派なチョン髷が結へる様になり、明治40年代の前半の中頃には更に倍する大チョン髷と成った」という。

丘の発言は、明治の半ば、極端に走った欧化主義に対して反動的に国粹保存の運動が起こり、それがその後偏狭な狂信的愛国主義に移っていったことを指しているのであろう。

丘は、「国粹を保存すると云ふことは誰が考えて見ても悪からう筈はない。自分の国の他国に優れて居る点を何時までも失はぬ様にと努力するのは、単に人情であるのみならず、国の存立のために実に必要なことである」という。しかし、真の国粹なるものは、何国の人にも聞かせても、成る程尤もであると得心する様なものでなければならぬのである。丘は「真に教育を改造する積りならば、今一度明治の初年に立ち帰った積りに成り、大英断を以て頭骨内のチョン髷を切り捨てることが何よりも先きに必要であらう」と説く。

#### d. 自動主義への転換

丘は、「15. 他力教育の危機」（「自由」・304-312頁、大正9年）において、先ず「我らが他力教育と名づけるのは、教へる側の者が、予め生徒に信ぜしめる個条を定めて置き、否応なしに之を生徒の頭に押し込めようと努める流儀の教育を云ふ」と定義し、専制時代の教育は悉く他力教育であって、教師は何時も治める者の指図に従い、その者に都合の良い考えを生徒の頭に詰め込むことを専ら努めたとする。他力教育に対して、自動主義、即ち「生徒をして自ら動かす主義」がぼつぼつ唱え出された。それは、「数年前に比して、自由に考へる人間の数が大いに増したからである」という。

自動主義の教育が完全に行われたならば、年の行かぬ小学校の生徒は兎も角として、中学

校ぐらいになれば、「何事でも自身で考へて見て成る程と得心の出来ることでなければ決して信ぜぬようになる。即ち独立自尊の精神が十分に養成せられていく」と見る。

丘は、大正デモクラシーの時勢にあつて、他力教育から自動主義の教育へと転換を見取っているのである。

e. 疑いの教育

明治維新以降、我が国の学校教育、特に初等教育にあつては、その進歩が目覚ましいものがある。丘は「之は誠に悦ばしい次第である」と評価しつつ、「一つ極めて大切なことを全く忘れて居るのではないか」と疑念を呈している。丘は、「16. 疑ひの教育」（「自由」・313-323頁、明治45年）において、「修身のことは暫く措き、読本でも、地理でも、歴史でも、又は理科でも、書物に書いてあること、先生の話して聞かせることを其のまま児童に信ぜしめる様な教授法を用いて居るとくに見受けられる」と指摘し、「問答法によって生徒に発言せしめることは有つても、實際は生徒の口を借りて教師の予期して居る答を云はせるのであるから、一種の八百長とも見做すべきもの」で、児童の頭脳を自発的に発動させることが甚だ少ないのである。

こうした実態把握をして、丘は「疑ひの教育」を提唱する。「一旦物に対して疑ひを起せば、之を解決せんがためには研究せずには居られず、研究の結果、疑問の解決を得れば、此所に一種云ひ難い愉快を感じずる」はずである。文明の進歩は発明発見が少しずつ重なりあつて行く結果であり、発明発見は研究によってのみ得られるもので、研究の始まりは先ず物に疑いを抱くことより起こるのである。

f. 理科の奨励

「11. 民族の発展と理科」（「人生」・216-234頁）では、丘は、支那と戦つて勝ち、また、世界の強國露西亞と戦つて勝ち、その結果として一等國と称せられるようになったが、残念ながら、現今の我が國は欧米の旧一等國よりも非常に劣つていて、殆ど足元にも達しないとしている。例えば新聞の廣告欄を見ると、彼の國の新聞雑誌には、自動車、自動船、瓦斯電氣の發動機等が紙面の大部を占めて居るのに対して、我が國では最も広く場所を取っているのは何時も売薬か化粧品に過ぎない。一等國から我が國が輸入するのは多くは機械類や製造品で、我が國の産物として有名なのは生糸と茶で、何れも天然物そのまま、人間の知力が加わっていることは甚だ少ないのである。

民族間の競争は日夜絶えず行われているので、この競争に負けぬためには物質文明の進歩が要件である。このことを悟らしめ、総て實地に徴する方法によって理科を授けて、何事も自身で直接に研究することの興味を起さしめたい。理科の奨励が必要といつても、決して理學者を沢山そろえると云う意味ではなく、常に理科の進歩發達を図ることに力を添えると云うような人間が今日より遙かに多くならぬと、我が民族の將來の運命は決して長く隆盛であり得ぬであらうと説く。

また、丘は「12. 教育と迷信」(「人生」・235-256頁)において、真の一等国になるためには、理学的精神を養成して、盛んに研究心を起させることが必要であるのに、理学的精神とは両立しない迷信、つまりその時代相当の知識をもって考えて到底信すべき理由のないことをみだりに信ずることが極めて多いとする。近來我が国では、教育の一手段として、神社仏閣に参詣することが行われ始めたようであるが、神社仏閣の由来・縁起を書いたものを見ると、何れも昔の未開の時代に誰かが造ったものと見えて、今の知識を以ては明らかに迷信と見做さざるを得ぬようなことで充たされている。現在の宗教から迷信に属する部分を引き去って、残余の部分を尊崇するように導くことができるならば、誠に結構であるが、神仏を敬う心を養おうと急ぐの余り、知らず知らず、迷信を伝え広げるようなことがあったらば、利よりも害の方が遙かに多い。丘は、このことを実際教育に従事している者は深く考えなければならぬと指摘している。

さらに、丘は、「17. 理科教育の根底」(「自由」・324-337頁、大正7年)において、近頃、立派な理化学研究所が新設され、理科や医学の研究者には補助金が与えられ、地方の中学校、師範学校における物理化学の設備を完全にするため何十万円かの金が支出され、理科教育研究会という新しい会が出来て『理科教育』と題する雑誌まで発行されるなど、理科教育振興の声が高いが、これはヨーロッパ大戦争(注: 第一次世界大戦のこと)の影響で、薬品、染料、ブリキ、硝子板、その他種々の日用品の輸入が止まって、日常の生活に甚だしい不自由を感じるに至った故と指摘している。丘によると、これは「一種の変態現象」であり、急場の間に合わせでなく、「研究心の養成」の必要性を訴えている。そのためには、「一組の生徒数を十人か十五人まで減ずること」が必要で、他の点に工夫を凝らしてもその効果は極めて不十分なるを免れぬのである。

確かに第一次世界大戦以後、理科教育、特に物理・化学教育ブームが起こったが、長くは続かなかった。また、少人数学級を求める丘の主張は、90年経た今日でも実現されているとはいえない。

#### 4) 両書にみられる思想と社会批判

筑波常治は、丘の思想全般に、日本人には珍しい厭世感が認められるという<sup>6)</sup>。また渡辺正雄は、丘には日本の伝統的な仏教的無常思想があらわれていて、それが進化論ないし生物学と結びついて表明されていることを発見したとしている<sup>9)</sup>。両専門家の見解を念頭において、検討してみる。

##### a. 厭世主義への批判

丘は「1. 人類の誇大狂」(「人生」・1-19頁)において、自分をわきまえず、「神か仏に成った積もりで、総て尊大に構へる病人がある。斯様な病症を医者の方では、誇大狂と名づける」とし、その実、“虚心平氣”に考えるならば「我々普通一般の人間も多少病気に罹って

居らぬ者は無い様である」という。それは、宇宙の広大さ、宇宙の歴史の長さから見れば、個人の命は勿論、人類の歴史など「殆ど何の長さもない一点の如く」である。さように考える丘にとっては、今日の哲学、倫理、教育、宗教などの書物を見ると、「殆ど一冊として誇大狂の徴候を現はして居ぬものはない」のである。例えば、「或る少年が、宇宙の解すべからずことを苦に病んで華嚴の滝へ飛び込んで世間大評判になったが、これなど誇大狂の極端に達したものであろう」と評される。「自分の脳髓が尚進歩の中段にあり、胃・腸・肺・肝等の臓器と同様に、唯生存に必要な程度までより発達して居らぬ故」「我々が宇宙を解釈し尽くし得ぬは素より当然のこと」なのである。

また、丘は「世の中には厭世主義などと称へて、実際の此世の成り行きを罵って自ら高しとする人々がいるが、之も誇大狂の増進した結果である」とする。厭世論者の言うところを約言すれば、唯このような世の中が自分の理想通りには成っていない、ならば寧ろない方が遙かに優っていると云うに過ぎない。確かに、善人は必ず栄え、悪人は必ず滅びるとは限らず、寧ろ正が倒れ邪が蔓るのが今の世の常態で、一生懸命に稼いでもその日々を食いかねている者がさらに思わぬ災難に遇うこともあれば、横着至極不屈千万なことをして、大金を儲けた者が、一生涯は素より、子や孫まで栄華に暮らしていることもある。然しながらこれは明らかに今日までの社会の制度に不条理な点があったに基づくこと故、これを見て自己の属する社会の改良に志すならば人間の分相当のこととして敢えて不思議はないが、単に懐手をしながら憤って見たり、世を厭うたりするのは、確かに人類の真価を見誤り、且つ自分の小なることをも打ち忘れた結果である。」と述べている。

厭世観が認められるとされている丘が、上述のように厭世論を批判しているばかりでなく、「一刻も速く誇大狂の範囲を脱して実験科学上確定した事実に基づき、公平なる眼を以て人類を観察し、其結果を利用して世を益する方法を工夫して貰いたい」と説く。そして、星学、地質学、生物学は誇大狂治療学科とも称すべき性質の学科で、これらの大要を心得ておれば誇大狂を防ぐことが出来ると主張する。

#### b. 戦争不可避論

丘は、「8. 人類の生存競争」(「人生」・152-170頁)は、他の動植物と同様に不可避であるとする。それは、人間の場合は、他の動物に比すると産児数は少ないけれども、人口は増加するからである。確かに、個人と個人とが咬み合い殺し合うことは稀で、互いに助け合う場合も少なくないので、人類の生存競争は、他に比して頗る緩やかに見える。しかし、商売敵同士や県会議員・市会議員の候補者間の競争、政党間の競争等、そしてその最大単位は国と国との競争、さらには民族間の競争がある。これらには、「少しの制限せられる所が無いから、全く猛獣の相戦ふのと同ならず、強ければ勝って栄え、弱ければ負けて衰へる」のである。

また、「生存競争なるものは如何なる場合に於ても、必ず物質の供給と需要との不権衡か



ら生じるのである」。逆に、物質文明社会においては、供給と需要の不均衡は不可避であるから、生存競争は必然なのである。国と国とが連合することがあるが、これとて、強国に対抗して生存するための手段であって、「必要が無くなれば、何時でも同盟を止める」ことは、「過去の歴史之を証明し、現在の事実之を明示し、将来の趨勢も亦其通りであらうと思ふ」と語る。

こうした観点に立つ丘にとっては、「9. 戦争と平和」(「人生」・171-196頁)において、「何所にも戦争のないと云ふ日は開闢以来恐らく一日も無からう」と云わざるを得ない。戦争と戦争との間には平和の時代が挟まっているように見えるが、その実、その際には必ず砲台を築き、軍艦を造り、出来得る限り兵力を整えて、次の戦争の準備をしているのである。このように考えると、「戦争と平和とは元来決して根本的に性質の相反する二種の状態ではない」のであって、幕を開けば戦争、幕を閉じれば平和であっても、「所謂平和の時代には又平和の戦争と名づける激烈な戦争があつて、劍や鉄砲を用ひこそせねが、其敗北者が悲惨な境遇に陥ることは決して真の戦争にも劣るものではない」のである。これは即ち人間の生存競争であつて、「人間の生存して居る間は到底避けることの出来ぬもの」なのである。

### c. 人類滅亡論

丘は、「20. 人類の将来」(「人生」・404-462頁)については、悲観的である。先ず、前段として昔から「一寸先は暗」という通り、未来の予言は難しいが、天文学者は、日食やハレー彗星の現れる日時を予言している。これは天体の運動を支配する法則を探り求め、これを将来に当てはめて予言しているのである。天文学の如く、人類の将来について、生物界の既往の変遷を調べ、それによって生物各種の榮枯盛衰を支配する法則を探り求め、これを人類に当てはめてみようと語っている。

「人類以前に地球上に全盛を極めて居た動物の例を挙げれば、古生代に於ける魚類、中生代に於ける爬虫類、第三紀に於ける獸類などである。此等は各々其時代に於いては恰も今日の人類の如く絶対に優勢なる位地を占めて、仮にも之に敵し得る動物は決して無かつた」ことを指摘し、これらの動物が何故に忽ち衰え亡びるに至ったかは大いに研究する必要があるとして、「我等の考へによれば、その動物種属自身の内に、自ら滅亡すべき原因が生じて、この原因が内から働くのと、外から攻める敵の力とが相合して、遂に滅亡せしめたのである」と説く。それでは、内から働いて滅亡せしめた原因は何であるかと云うに、「必ず、初め其種属を急に勃興せしめた原因と同一のものである」とする。具体的には、或る動物は体が大きく筋肉が強いことによって、或る動物は武器の強いことによって、確かに生存競争に勝つて優位に立ったが、同時に大量の食物を要し、成長に長年月を要し、繁殖が遅くなり、動作に敏捷性を欠くこと等種々の不利益が付帯しているのである。これは、「恰も不相当に多くの海陸軍を造つた貧乏国が、武器を維持するために重税を課する結果として、総べて他の方面が疲弊し、終には国全体が衰へざるを得ぬ如く」と説く。

ここで、丘は、日露戦争（明治37-8年）に勝利し、列強の仲間入りする一方での国民への負担増を脳裏に浮かべていたのであろう。

丘によると、「シャミセンガイやオウムガイの様な何所の隅に生きて居るか分らぬ程の微々たる生活を営んで居るものは却って古生代から今日まで引き続いて居るのに反し、一時急に盛になって、暫くは絶対に優勢を保って居た様な動物が悉く次の時代に滅び失せたと云ふことは、如何に初め生存競争に都合の良かった性質でも或る程度を超えると却て生存競争に不利益なものとなり、且身体が或る一定の生活法に適する様に専門的に変化すると総べて他の方面には、それだけ不適當なものとなり、終に生存競争上不利益な位地に陥って、漸次他の種属のために滅ぼされるに至った」のである。

こうした生物界の栄枯盛衰を人類に当てはめると、人類が今日の優勢なる地位を達せしめたのは脳と手との力により、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく益々榮えていくか否や、一刻毎に速力を増して滅亡の運命に向かって進んでいるのではないだろうか、と丘は疑念を呈し、結論的には人類滅亡論に傾斜していく。

具体的には、器械を用いる以上は所有権というものが生じ、財産なるものが現れ、同時に財産を貸して利子を取る制度も起り、必然の結果として貧富の差が拡大すること、器械を用いる結果として生活が次第に自然の状態から遠ざかり、体は次第に天然に対する抵抗力が滅じ、段々に虚弱になっていくこと、出産に際しては必ず産婆・看護婦・産科医師の助けを借りなくてはならなくなり、その上難産が殖えていくこと、一寸外に出ると、電車や汽車に乗るが、その喧しい響きは聴神経を通じて脳の中樞を刺激し、活動写真を見ると激烈な光と暗黒とが交互に眼の網膜と視神経と脳を刺激しているので、かくして神経は次第に衰弱し、あるいは過敏になり、精神病者・自殺者・犯罪者が統計的にも増していること、教育が進んで脳の働きが発達すると、万事自分で判断し識別する力が増す故、若しも社会に不条理な制度が存在する時は忽ちこれに気が付き、不都合を感じ、不利益な地位にある者は耐え難き不平を持つに至ること、かくする内に、今日のように虚無党、社会党、無政府党等の結社が盛んになること、自分の生存への不安から酒や煙草が盛んに用いられ、酒精中毒によって震戦性譫妄症に罹り、煙草の中毒によって視力を鈍衰するのは世人の知るところ、更に驚くべきは、子孫の体質を害し、精神病者、低能者、体質異常者を増加させること、製造工業が盛んになり、飲食物を一か所で多量に製造し一時貯蔵して置くため防腐剤を加えたり、酒にサリチル酸を加え、醤油にサッカリンをいれることは既に行われていて、長い間に少しずつ身体を害するとも限らないこと、製造工業の発達に伴い分業化が進み、職業病を発生させること、私欲の増大・人心の墮落に生活難が加わり相互扶助の精神が薄らいでいくこと、等々と現代文明のもたらすマイナス面が綴られている。

とすれば、どう対応したらよいのであろうか。丘は、文明諸国では、養育院、孤児院、慈善会、出獄保護者会、安価食物供給所、無銭飲食所、労働者養老金、貧困者慰問その他種々

の救済法が行われているが、「此等は病の原因を除くのではなく単に現れた症状に対する療法である故、素より姑息なるを免れぬが、適当に行はるれば、其れだけの効は充分あるべき筈である」とする。そして、「人類の過去に鑑み、将来を慮れば、前に挙げた如き諸種の救済法は何れも今後益奨励して出来る得る限り協力一致の精神を失はぬやうに努めねばならぬ。之が、軍備の充実と共に、他の民族の間に介在して、他の民族に敗けぬための唯一の手段である」と、時局柄か民族主義の一端をのぞかせている。

丘は、人間は、何時死ぬか分からぬ存在であるが、毎日この事を考えて、悲観し続ける者はいないと論じ、「万一この文を読んで悲観に傾く人があったならば、その人は已に現時流行の神経衰弱症に罹って居ると診断せざるを得ぬ故、我等はその人に向ふて、病勢の募らぬ内に速に療法に取り掛かることを切に勧告する」と結んでいる。

なお、丘は、本書4版（大正10年9月発行）の「はしがき」で、学業不振で退学を命ぜられる者が往々あることを思えば、「我らの如き二十ケ年も思想が原の級に止まって居る人間は思想不進の廉を以て、当然言論界から隠退すべき筈である。我らは斯く考へる故に、本書に追加した一文を最後として今後は一切何も書かぬことを定めた」と絶筆を宣言している。

#### d. 人生観

丘は、人生観の話をしてもらいたいとの依頼に応えるかたちで、「一種の人生観」を語っている（「自由」・259-267頁、大正元年）。

「我らは常に生物学を修めて居る関係から、何事を考へるに当っても、生物界に比較して生物学的に観察する習慣がある」と前置きして、海中に住む動物には、①海の底の岩などに固着して、動かずに一生を送る類（ベントス）②海の表面に一生浮かんだままで暮らす類（プランクトン）③自分の力で自由に水中を泳ぐ類（ネクトン）があるとして、論を進める。

その要点は、次の通りである。

世人が人生観と云うことを問題にするのは畢竟安心立命を得ようとする希望のためであつて、人間が一定の信念の下に安心立命を得ている具合は、あたかもベントス仲間が岩に固着している状態であり、岩から引き離されたベントスの状態が即ち不安心・不立命で、煩悶しているあり様である。ベントスの吸い着いている岩は本物の岩であるが、人が吸い着いている真理なるものは、信じない人から見れば人の細工で造った張り子に過ぎない。

それに対して、プランクトンの類は、他物に吸い着いて安心の味を知らぬから浮いていても別段不安心の感じもない。もし、人生観とか安心立命とか云うことを考えずに生活している人がありとせば、その人は大にプランクトンの的である。

「一体世の中の事を考へて見ると、永久に不変と云ふものは容易には見出されぬ。確乎として動かぬと信ずる物にしがみ付いて安心して居る人もあるが、その物が存外怪しいことが甚だ多い」のであり、「さざれ石が巖となりてと云う文句があるが、それと同時に巖が砕けてさざれ石と成ることもあって、岩の如き固い物さへ決して何所まで変らぬ訳ではない」と、

君が代の一部を引用している。ここには、丘の無常感を伺わせている。さらに続く。

人生観などと云う一人一人が勝手に造ることの出来るような、最初から怪しいものに吸い着いているよりも、初めから岩に吸い着かず、従って安心立命とか不安心不立命と云うことも知らず、「ベントス的の境遇を超絶した心待ちで生活することが出来たならば、或は其の方が尚一層結構ではあるまいか。人生観などと云ふことを考へずに措くのも、之また一種の人生観と思はれる」と結論づけている。これは、丘自身の人生観であろう。

e. 現代文明批評論

丘は、『煩悶と自由』の最後に、“追加”として「現代文明の批評」（「自由」・363-413頁、大正9年）を行っている。彼の基本的考え方は、多くの論者が「今日の文明人を以て進歩の途中にあるものと見做し、現に上に向ふて坂を登りつつあり」と考えているが、「我らは之に反し、人類は已に下り坂の中程にあつて、一步一步退化し行くものと考へる」点であり、これは、生物学の研究に基づいた「我らの一個の意見に過ぎぬ」としている。結論的にいえば、「今日人類は団体が余り大きく成り過ぎたために、団体間の自然淘汰が行はれず、其の結果として団体生活に必要な協力一致の性質が次第に退化した」ことである。そして、「現代文明の何れの部分にも通じた徴候は、服従性の退化のために起つた現実に対する不満と、協力一致性の減退を勘定に入れぬ幻影的理想に対する憧憬とである」とする。

丘によると、“現実に対する不満”の解消には、現実を忘れることで、そのためには身体を通して働く麻醉薬～酒や煙草等～か、精神を通して働く迷信かを服用するに限るのである。また、“協力一致の減退”は、個人的利己心を増す弊害をもたらし、その実例がヨーロッパやアメリカなどの文明国の新聞紙に毎日幾つでも出ている。こう考えて見ると、「現代の文明は初期の癌患者が大礼服を着飾って居る状態に匹敵する」のである。そして、丘は、当分の間、白色人種が有色人種を圧迫しながら、有色人種は白色人種の圧迫を受けながらも一致団結に至らず、「何れも民族間の紛議と民族内の騒擾とに追はれて日を過ごすことであらう」と論を閉めている。

このように、丘は、現代文明を極めて悲観的にとらえている。やはり、丘の頭脳は、厭世主義に染まっているのであろうか。

摘 要

1. 日本進化論史上注目すべき大著である丘浅次郎の「進化論講話」の概要を紹介し、その解説をおこなった。

そしてこれに対してなされた批判、特に北一輝と石川三四郎のそれを紹介するとともに丘自身の北に対する反論を取り上げた。

2. ダーウィンの「種の起源」(第6版)の校訂に丘が携わったことを紹介した。因みに、「種の起源」本邦での初めての翻訳は立花銃三郎によってなされたが(邦訳名「生物始源

一名種源論)], 専門家の校閲を経たのは丘によるものが始めてである。

3. 丘の教育論・文明批評の一端を取り上げ検討した。

#### 参考文献

- 1) 武田時昌:「加藤弘之の進化学事始」265頁, 坂上孝(編)『変異するダーウィニズム—進化論と社会』京都大学学術出版会(2003)
- 2) 徳田御稔:『進化・系統分類学』1-4頁, 共立出版(1970)
- 3) 上田成利:「群体としての社会—丘浅次郎における「社会」の発見をめぐる」, 323頁, 坂上孝(編)前出
- 4) 筑波常治:「日本の人類退化論—丘浅次郎論序論」255頁, 川喜多二郎他(編)『人間』中央公論社(1966)
- 5) 同:「丘浅次郎先生1, 2」「採集と飼育」44巻(1)51-57頁, (2)110-114頁(1982)
- 6) 同(編):『丘浅次郎集』456-463頁, 『近代日本思想体系 9』筑摩書房(1974)
- 7) 同 4)に同じ
- 8) 同『丘浅次郎と人類滅亡論』『科学の思想』23-29頁(1964)
- 9) 渡辺正雄:「丘浅次郎の生物学と無常思想」科学史研究 第Ⅱ期 12巻, 114-121頁〔1973秋〕